

序

一九九〇年代のアートは、理論的言説の欠落によって誤解に晒されている。大多数の批評家や哲学者たちは、同時代の実践の全貌を把握しようとすらず、それに対して嫌悪感を抱いているようだ。その結果、一九九〇年代のアートの独自性や正当性は、解決済みであるにせよ未解決であるにせよ、先行世代が取り組んだ問題の分析によっては認識することができないために、本質的に理解不能なものとして放置されている。どれほど辛くとも、ある種の問題はもはや議論の俎上にも上がらないという事実を受け入れなければならない。その上で今日のアーティストにとって固有の問題を特定する必要がある。コンテンポラリー・アートの実際の争点^{アンジュ}とはいったい何

か。それは、社会、歴史、文化とどのように関係しているのか。批評家の第一の仕事は、特定の時代に立ち上る諸問題の「入りくんだ争点」を再構成し、提示されたさまざまな応答を仔細に検討することであり、過去の問題を列挙し解決策が得られなかったことを嘆くことではない。さて、そうした新しいアプローチに関する第一の問いは、言うまでもなく作品の物質的形式に関するものである。⁽¹⁾それがプロセスや行為とみなされようとも、いずれにせよ伝統的な基準に対して〈破壊的〉なアプローチを取る、一見とらえがたい制作物を、一九六〇年代の美術史の影響を振り切った上でどう解説するのか、それが問われているのである。

いくつか具体的な事例を挙げてみよう。リクリット・ティラヴァーニャはコレクターの家で夕食会を催し、タイのスープ料理に必要な食材や調理器具をコレクターに渡した。フィリップ・パレーノは五月一日^{メーデー}に知人を集め、ぬいぐるみに着せるTシャツを、流れ作業で制作する作業に従事させた。ヴァネッサ・ビークロフトは似たような赤い衣装とかつらを着用させた二十人ほどの女性たちを展覧会場に立たせ、観客に眺めさせた。マウリツィオ・カテランはチーズ——商品名「ベル・パエーゼ」^{「イタリア語で『美しい国』」}——を餌に与えて育てたネズミをマルティブル作品として販売し、金庫破りにあった金庫を彫刻作品として展示した。ジェス・プリンチとヘンリッ

ク・ブレンゲ・ヤコブセンは、都市暴動の後の光景を想起させるようにコペンハーゲン市内の広場でバスを横倒しにした。クリスティーン・ヒルはスーパーでレジ打ちとして働き、週に一度ギヤラリーでワークアウトを開催した。カールステン・ヘラーは恋愛状態の人の脳から分泌される物質を合成し、空気で膨らむビニール製ヨットを製作し、ズアオアトリに新しいさえずりを覚えさせる様子をビデオで記録した。平川典俊は展覧会協力者として若い女性を募集するために、小さな個人広告を新聞に出稿した。ピエール・ユイグは展覧会の会期中に素人俳優を集めたオーディションを開催し、市民が自由に使うことができるテレビ局を作り、工事中の労働者を撮影した写真を工事現場のすぐそばに掲示した……ここに、さらに多くの名前と作品を追記することができよう。いずれにせよ、アートというチェス盤上で最も活発な展開を見せているのは、相互的、交^{コンツイグアル}歆^(四)的、関係的な局面なのである。

今日、コミュニケーションは「効果的な広告手段として利用され」、社会的なつながりを特定の商品の消費へと切り分けて管理する空間に、人々の接触を閉じ込めてしまう。一方で芸術活動は、ささやかなつながりを作り出し、閉ざされた通路を開き、隔てられた現実の諸次元をひとつにしようと務める。高名な「コミュニケーション・スパーハイウェイ」^(五)は、キャッシャーやレ

原理に従属させるように誘導することこそが、支配権力の最優先事項となる。この関係の経路を脅かす究極の〈分離〉は、ギー・ドウボールが描写した〈スペクタクルの社会〉への移行の最終段階である。その段階に達した社会では、もはや人間関係は〈直接経験される〉ものではなくなり、〈人目を引く〉^{スペクタキュラー}表象の中へ遠ざかって行くのである。ここに、今日のアートにおける最も切実な問題がある。伝統的に世界の〈表象〉を取り扱うことに専心してきた活動の場——美術史を振り返ろう——において、今なお世界との現実的な関係を生成することは可能なのだろうか？ドウボールは、アートの世界を日常生活において具体的に〈実現〉されるべき事例の貯蔵庫とみなしたが、それに反して現代の芸術的実践は、社会的実験をはぐくむ肥沃な土壌と、行動の画一化から部分的に保護された空間を提供している。本書が考察の対象とする作品は、すべて手の届くユートピア^{ユートピア}の設計図なのである。

本書所収のいくつかの論考は、もともと雑誌——多くは『アートに関する記録 [Documents sur l'art]』誌——や展覧会カタログに掲載されていたものである。⁽¹⁾しかし本書の刊行にあたり、それら既出の論考には大幅な改訂を加えた。そのほかの論考は本書が初出となる。⁽²⁾読者が問題となる言葉や概念に行き当たった際に参照できるよう、巻末には語彙解説を付した。本書の理解をよ

り容易にするために、今すぐ〈アート〉の項目を参照されるようおすすめしておこう。